

## 『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

——三之卷三「雀は百まで舞子の年寄」を中心に——

王 欣

はじめに

明和三年（一七六六）に刊行された上田秋成の浮世草子作品『諸道聴耳世間狙』<sup>①</sup>（以下『世間狙』と略称する）三之卷三「雀は百まで舞子の年寄」の舞子宇治江の人物造形に関して、徳田武は、舞子宇治江のモデルが正慶尼であると述べた。<sup>②</sup>後に、日野龍夫は、徳田武のその解釈に賛同しなかった。<sup>③</sup>

その他、森山重雄や日野龍夫は、『世間狙』三之卷三と、演劇作品謡曲『卒塔婆小町』、『御所桜堀川夜討』（以下『堀川夜討』と略称する）、<sup>④</sup>『七條釜淵雙級巴』（以下『釜淵雙級巴』と略称する）、『小野小町都年玉』（以下『都年玉』と略称する）、『大和歌五穀色紙』（以下『五穀色紙』と略称する）、『七小町』、『昔男春日野小町』との関連性を分析してきた。<sup>④</sup>

これまで『世間狙』三之卷三に関する論述は、個々の趣向の出典を検討する段階で止まっている。また、日野龍夫の「秋成と時代物浄瑠璃」では、「五郎市が登場してから話の終り三分の一ほどは、本来のテーマとは関係のない五郎市の転落譚をもつばら述べる」という指摘が見られる。どうして三之卷三の物語は、宇治江の恋愛譚と石河五郎市の転落譚という二つの部分からなっているのか。

『世間狙』三之卷三の石河五郎市の名前、盗みをするという特徴からみれば、石河五郎市の転落譚は、盗賊石川五右衛門の転落譚を示唆しているように読み取れる。『世間狙』が脱稿された明和元年（一七六四）十一月までに、上方で上演された石川五右衛門を主人公とする演劇作品として、『釜淵雙級巴』、『石川五右衛門』、『傾城吉岡染』（近松門左衛門作）が挙げられる。<sup>⑤</sup>『世間狙』三之卷三の物語の展開は、それらの演劇作品とどんな関連性を持っているだろう

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

か。

上記のような問題を解決するため、本稿においては、『世間狙』三之巻三の物語の展開に考察を加えることで、『世間狙』三之巻三の宇治江の恋愛譚と石河五郎市の転落譚が、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』（近松門左衛門作）と、最も強い関連性を持つていることを究明したい。

### 一 舞子宇治江にまつわる「恋」

『世間狙』三之巻三では、京の智恩院の古門前にある辰巳屋の宇治江という舞子は、五十を過ぎてても派手なかつこうで勤める。智積院の僧たちに呼ばれた時、「関寺小町」を歌った宇治江は、僧たちからかわれたが、自分の恋愛観を熱弁して、二人の僧を言い負かし、帰ってしまう。

『世間狙』三之巻三の宇治江にまつわる物語の展開は、次のようになる。

① 京の智恩院の古門前に辰巳屋宇治江といふ舞子あり。(中略)  
 とやくするうちに(中略)③ きんしやうくの大吉鬻のと鱧節  
 あんだやうに結立て。腰に梓の弓をのしきり。幅広縹子の三重  
 廻り。吉弥結びに金糸の房たつぷりと。塗下駄に青天井の日傘。  
 夜目遠目にも女の外科とよりはいひやうのなき風俗。(中略)

④ 宮川町の丹波屋で。三味線継で本調子に合せつ、哥はづかしや人の恨みのつもりきて。たのむ物には竹の杖泣つ笑ふつ物ぐるひと。関寺小町を諷ひ出せば。客は智積院の出家達。(中略)  
 ⑤ 一人の和尚が是く老女。そもじが諷ふは小町が年寄て物もらいになつた文句。こなたが弾と正真の小町が出現したやうで気がめいる。何ぞはんなりとした物をと望めば。宇治江少しむつとした顔。(中略)たとへ深山の朽木でも花さく春もござんした。わたしも盛りは過ましたれど。心の花がかわらねばこそ。  
 (中略)なる程あなた方の墨染もこよひの座敷のこひ衣女郎の手くだも仏の方便と声あら、かに罵れば誠に名うてのすつばの皮。背中の兀し藝子やと僧は天窓をかきく。あのげい子迎ひが来たらいなしたもといはるれば。宇治江は猶も腹たて、川竹の勤なりやこそあしからめ嫌なら何かくるしかるべきとおこりちらして帰りける。扱此宇治江が卅四五の比。庚申の夜祇園町の一方で大よせの雑喉寝に。鬼若の弁蔵といふ髻間にくどかれて。たつた一度で其種を孕み。産おとせしは玉のやうな男の子。

この場面では、舞子宇治江が「関寺小町」を歌う。『日本歌謡集』成』巻八の『新大成線の調』の「うたひ本てうしの部」の三一七番

に「せきでら小町ながうた」が収録されている。

三二七 關寺小町 長うた

思ひいづればなつかしや、人のうらみのつもり来て、いつのころより、うかれいで、たのむものにはたけのつえないつわらうつものぐるひと、人はあだしの夢なれや、とふはうらめしむかしは小町、今はすがたも、はづかしや（中略）われながらはづかし三下りも、夜のぶのかよひちは、雨のふる夜もふらぬ夜も、ましてゆきしもいとひなく合心つくしに身をくだく、ひと夜をまたでししたりし深草の少将の、そのをんねんのつきそひて、かやうにもを思ふぞやあなたへはしり、こなたへはしり、ざらりくざらくざと、こひえぬときには合あくしん、またきやうらん心のつきて、こゑかはりけしからず見ゆればすごとくと關寺のいほりにかへるありさまは、やまだの畔のか、しよの、あきはてたりなわがすがた。

（『新大成糸の調』）（傍線、記号引用者）

長唄「関寺小町」の展開は左記の通りである。

イ 小野小町は、落ちぶれる。

ロ 小野小町は、深草少将との恋を懐かしく語る。

『世間狙』三之卷三の「はづかしや人の恨みのつもりきて。たのむ物には竹の杖泣つ笑ふつ物ぐるひと」を、「せきでら小町ながうた」の「なつかしや、人のうらみのつもり来て」、「たのむものにはたけのつえないつわらうつものぐるひと」と対照すると、冒頭部分の「はづかしや」と「なつかしや」との相違を除けば、両者は一致している。よって、『世間狙』三之卷三のこの場面で、宇治江が歌う歌謡は長唄「関寺小町」だと判断できる。

『世間狙』三之卷三の宇治江が智積院の僧といる場面の展開に、長唄「関寺小町」の展開を付け加えると、次のようになる。

- ① 宇治江は、京の智恩院の古門前にいる。
- ② 宇治江は、舞子である。
- ③ 宇治江は、かわった装いをしている。
- ④ 宇治江は、三味線に合わせ、歌謡を歌う。
- ⑤ 宇治江は、「関寺小町」を歌う。
- イ 小野小町は、落ちぶれる。
- ロ 小野小町は、深草少将との恋を懐かしく語る。
- ⑥ 宇治江は、物もらいになった小野小町と似ている。
- ⑦ 宇治江と智積院の僧との間で、「恋」に関する口説が展開される。
- ⑧ 宇治江と僧との口説が終わった後で、石河五郎市の「窃盗」に関する物語が始まる。

従来の研究では、『世間狙』三之卷三の宇治江と智積院の僧との

口説が、謡曲『卒塔婆小町』の小野小町と高野山の僧との問答に關連しているとされている。<sup>⑦</sup>

謡曲『卒塔婆小町』<sup>⑧</sup>の展開は左記の通りである。

- ① 小野小町は、山の中の隠家にいる。
  - ② 小野小町は、隠居している姥である。
  - ③ 小野小町は、質素な服装をしている。
  - ④ 小野小町は、落ちぶれる。
  - ⑤ 小野小町は、物もらいになる。
  - ⑥ 小野小町と僧との間で、教義に關する口説が展開されている。
  - ⑦ 小野小町は、深草少将との恋を懐かしく語る。
  - ⑧ 小野小町と僧との口説が終わる。
- また、日野龍夫の「秋成と時代物浄瑠璃」によると、謡曲『卒塔婆小町』の教義問答を色欲問答へと変えるパロディーは、浄瑠璃作品『都年玉』、『五穀色紙』にも見出せる。
- 『都年玉』<sup>⑨</sup>三段目の小野小町と鉢敲きとの口説の場面の展開は、左記の通りである。
- ① 小野小町は、化野につく。
  - ② 小野小町は、関白公義実の娘で、深草少将と駆け落ちをする。
  - ③ 小野小町は、自分の姿も髪も乱れにする。
  - ④ 小野小町は、鉢敲きを騙すため、死んだ馴染み客の妄執にと

りつかれて物狂いとなった島原の傾城音羽になります。

- ⑤ 小野小町は、傾城音羽になりますまし、馴染み客との恋を懐かしく語る。

- ⑥ 小野小町と鉢敲きとの間で、「恋」に關する口説が展開されている。

- ⑦ 二人の僧が逃げて行くと、小野小町は、隠れていた深草少将を呼び出す。

『五穀色紙』<sup>⑩</sup>の二人の鉢敲きと出会う場面では、小野小町と共に駆落ちをする深草少将は、贖物狂いになり、鉢敲きと口説を展開する。『世間狙』三之巻三で、僧と口説を展開する宇治江は女性であるが、『五穀色紙』で、鉢敲きと口説を展開する深草少将は男性である。つまり、主要人物の設定から見れば、『世間狙』三之巻三の舞子宇治江と僧との口説の場面は、『五穀色紙』の深草少将が贖物狂いになって、二人の鉢敲きとの口説の場面と完全に違う。

小町物を調べてみれば、謡曲『卒塔婆小町』のパロディーは、浄瑠璃作品『七小町』<sup>⑪</sup>五段目「卒塔婆小町」にも見られる。

『七小町』五段目「卒塔婆小町」におけるお蘭の方にはまつわる物語の展開は左記の通りである。

- ① お蘭の方は、山の中の隠家にいる。
- ② お蘭の方は、深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失う。

【表1】

	『世間狙』三之卷三 宇治江	謡曲『卒塔婆小町』 小野小町	『都年玉』 小野小町	『七小町』 お蘭の方
①	京の智恩院の古門前にいる。	×	×	×
②	舞子である。	×	×	×
③	かわった装いをしている。	×	×	×
④	三味線に合わせて、歌謡を歌う。	無	無	無
⑤	⑤—イ 落ちぶれる。(小野小町のまねをする)	△(*1)	無	無
⑤	⑤—ロ 昔の恋を懐かしく語る。(小野小町のまねをする)	△(*1)	△(*1)	△(*1)
⑥	物もらいになる。(小野小町のまねをする)	△(*1)	×	×
⑦	「恋」に関する口説が展開される。	×	○	○
⑧	口説が終わった後で、「窃盗」に関する物語が始まる。	×	△(*2)	×

(\*1) 『世間狙』三之卷三の宇治江が小野小町のまねをするという設定を除けば、主人公が落ちぶれるという点において、宇治江が謡曲『卒塔婆小町』の小野小町と一致するし、昔の恋を懐かしく語るとい設定において、宇治江が謡曲『卒塔婆小町』の小野小町、『都年玉』の小野小町、『七小町』のお蘭の方と似通う。さらに、物もらいになるとい設定において、宇治江が謡曲『卒塔婆小町』の小野小町と符合する。

(\*2) 『世間狙』三之卷三では、宇治江と僧との口説が終わってから、石河五郎市の「窃盗」に関する物語が始まる。『都年玉』三段目では、二人の僧が逃げて行った後、小野小町は隠れていた深草少将を呼び出す。口説が終わってから、物語の新しい展開が始まるという点において、両者は似通っている。だが、新しく展開された内容において、両者は異なる。

- ③ お蘭の方は、隠居している老女である。
- ④ お蘭の方と高野聖の姿となった八雲皇子との間で、「恋」に  
関する口説が展開されている。

⑤ お蘭の方は、小野小町と深草少将との恋を懐かしく語る。

⑥ お蘭の方と高野聖の姿となった八雲皇子との口説が終わった  
後で、お蘭の方が、父の丸太夫と共に正気を失い、泣き伏す。

さらに、『七小町』四段目で、小野家から出ようとするお蘭の方  
は、質素な服装に着替える。

上述した内容をまとめ、『世間狙』三之卷三の宇治江と僧との口  
説の場面で、宇治江の人物造形と諸演劇作品との関連性を整理する。

表1のように、『世間狙』三之卷三の宇治江と僧との口説の場面  
は、謡曲『卒塔婆小町』、浄瑠璃作品『都年玉』、『七小町』と関連  
性を持っている。なお、本文の詞章においては、謡曲『卒塔婆小  
町』と類似している。しかし、ここでは、『世間狙』三之卷三の宇  
治江と僧との口説の場面において、

- ① 宇治江は、京の智恩院の古門前にいる。
- ② 宇治江は、舞子である。
- ③ 宇治江は、かわった装いをしている。
- ④ 宇治江は、三味線に合わせ、歌謡を歌う。
- という四つの設定が、謡曲『卒塔婆小町』、浄瑠璃作品『都年玉』、

『七小町』の設定と対応しないことに注目したい。

## 二 石河五郎市にまつわる「窃盗」

『世間狙』三之卷三の石河五郎市の出生の設定と関連する演劇作  
品について、森山重雄は「上田秋成初期浮世草子評釈」では、『堀  
川夜討』、『釜淵雙級巴』を指摘した。また、前掲の日野龍夫の「秋  
成と時代物浄瑠璃」では、『七小町』、『昔男春日野小町』が挙げら  
れている。その中で、庚申の夜の一夜の契りて男の子を孕むという  
趣向のみならず、庚申の夜にやどる子が盗みをするという物語の展  
開に関わる重要な特徴においても、『世間狙』三之卷三の石河五郎  
市が、演劇作品『釜淵雙級巴』<sup>12)</sup>の石川五右衛門と似通っている。さ  
らに、主人公の名前からみれば、『世間狙』三之卷三の石河五郎市  
が、盗賊石川五右衛門を示唆している。

さて、『世間狙』三之卷三では、石河五郎市の「窃盗」行為に関  
する描写は次のようである。

① 宇治江は猶も腹たて、

川竹の勤なりやこそあしからめ嫌なら何かくるしかるべき

とおこりちらして帰りける。扱此宇治江が卅四五の比。庚申の  
夜祇園町の一方で大よせの雑喉寝に。鬼若の弁蔵といふ替間に  
くどかれて。たつた一度で其種を孕み。産おとせしは玉のやう

な男の子。(中略) 十一二より舞と三絃を仕こみて。名は石河五郎市と付て宮川町の四匂花。よい子じやと評判よく江戸の親方が百両に飛付て談合すれば。一人子ながら又出世の種にもと十五の春より江戸へ下しけるに。堀町でも見事な繁昌。傍輩の子供を売ひしけば。親方も近年の銀箱と。(中略) されば庚申の夜にやどる子はと下世話にいふにちがひなく。此五郎市とかく手癖がわるく。客の寝入るを考へて涕紙袋の中を探し。一步小玉銀にかぎらず。目についた物をはづしければ。寝こきか浦の客衆も度がさなれば気が付て。(中略) 逆もなをらぬ根性と見かぎり果て長のいとま。京の親へも聞へたれば内へもどるな勘当ぞと。(中略) 引とめられて挑灯のあかりにちらと見た顔あるかと思れば南無三はや仕てやられた

(「世間狙」三之卷三) (傍線、番号引用者)

『世間狙』三之卷三の石河五郎市の「窃盗」に関する展開は次のようである。

- ① 宇治江と僧との口説が終わった後で、石河五郎市の「窃盗」に関する物語が始まる。
- ② 石河五郎市は、上方で舞と三弦を習い、江戸の親方に雇われため、江戸へ行く。

- ③ 石河五郎市は、江戸で働き、親方を養っていた。
- ④ 石河五郎市は、庚申の夜に孕んだ子なので、はからずも窃盗を始める。

⑤ 石河五郎市は、何度も窃盗をする。

⑥ 石河五郎市は、捕まり、勘当の罰を受ける。

⑦ 石河五郎市は、罰を受けても、人々の不用心によって、窃盗が止まない。

前述したように、『世間狙』三之卷三の石河五郎市は、出生において、演劇作品『釜淵雙絞巴』の石川五右衛門と関連している。

『釜淵雙絞巴』では、石川五右衛門の「窃盗」行為は、次のように展開されている。

- ① 冒頭から石川五右衛門に関する物語が始まる。
- ② 石川五右衛門は、河内での畑仕事が好きで、人の物を我が物にするため、河内から追い出され、都にのぼる。
- ③ 石川五右衛門は、都で窃盗をする。
- ④ 石川五右衛門は、武士になりたいため、窃盗を始める。
- ⑤ 石川五右衛門は、何度も窃盗をする。
- ⑥ 石川五右衛門は、捕まり、釜煎りの罰を受ける。
- ⑦ 石川五右衛門は、罰を受けても、人々の不用心によって、盗賊がまた出てくると予言する。

【表2】

	『世間狙』三之卷三 石河五郎市	『釜淵雙級巴』 石川五右衛門	『石川五右衛門』 石川五右衛門
①	口説が終わった後で、「窃盗」に関する物語が始まる。	×	×
②	親方の関係で居場所が変わる。	×	×
③	自分が働いて、親方を養っていた。	×	×
④	はからずも窃盗を始める。	×	×
⑤	何度も窃盗をする。	○	○
⑥	捕まり、罰を受ける。	○	○
⑦	罰を受けても、人々の不用心によって、窃盗が止まない。	△（*）	△（*）

（\*）『世間狙』三之卷三では、石河五郎市は、罰を受けても、人々の不用心によって、窃盗が止まない。演劇作品『釜淵雙級巴』では、石川五右衛門は、罰を受けても、人々の不用心によって、盗賊がまた出てくると予言する。浄瑠璃作品『石川五右衛門』では、石川五右衛門は、罰を受けても、盗賊が絶えないと予言する。即ち、主人公が罰を受けても、窃盗は止まないという点において、三者は一致する。しかし、窃盗が止まない原因について、『世間狙』三之卷三は、演劇作品『釜淵雙級巴』と同じ、人々の不用心が挙げられているが、浄瑠璃作品『石川五右衛門』では、何の設定もない。そして、『世間狙』三之卷三では、石河五郎市は生き残っているが、演劇作品『釜淵雙級巴』、『石川五右衛門』では、石川五右衛門は、釜煎りの罰を受け、死んでしまう。よって、窃盗を続ける人物において、『世間狙』三之卷三は、演劇作品『釜淵雙級巴』、『石川五右衛門』と異なる。



ところで、周知のように、石川五右衛門を扱った最も早い浄瑠璃作品としては、松本治太夫正本『石川五右衛門』<sup>13</sup>が挙げられる。

浄瑠璃作品『石川五右衛門』の石川五右衛門の「窃盗」行為に関する描写は次のようである。

- ① 遠州の大野家のお家騒動の内容が終わった後で、石川五右衛門（真田藏之進ゆきつら）に関する物語が始まる。
- ② 石川五右衛門は、遠州で武家奉公をしていたが、大野家のお家騒動のため河内へ行く。
- ③ 石川五右衛門は、河内で妻子および彌之介と一緒に働きながら、暮らしている。
- ④ 石川五右衛門は、貧苦に迫られ、窃盗を始める。
- ⑤ 石川五右衛門は、何度も窃盗をする。
- ⑥ 石川五右衛門は、捕まり、釜煎りの罰を受ける。
- ⑦ 石川五右衛門は、自分が罰を受けても、盗賊は絶えないと予言する。

上述した『世間狙』三之巻三の石河五郎市の「窃盗」に関する展開を、諸演劇作品における石川五右衛門の「窃盗」行為に関する描写と比較する。

表2のように、『世間狙』三之巻三の石河五郎市の「窃盗」に関する展開は、演劇作品『釜淵雙級巴』、『石川五右衛門』と関連して

いる。ところが、『世間狙』三之巻三の石河五郎市の「窃盗」に関する展開において、

- ① 宇治江と僧との口説が終わった後で、石河五郎市の「窃盗」に関する物語が始まる。
- ② 石河五郎市は、上方で舞と三弦を習い、江戸の親方に雇われため、江戸へ行く。
- ③ 石河五郎市は、江戸で働き、親方を養っていた。
- ④ 石河五郎市は、庚申の夜に孕んだ子なので、はからずも窃盗を始める。

という四つの設定は、演劇作品『釜淵雙級巴』、『石川五右衛門』における石川五右衛門の「窃盗」行為に関する描写と一致しない。だから、『世間狙』三之巻三の石河五郎市の「窃盗」行為とより強い関連性を持つ作品が、ほかにあると考えられる。

### 三 止まない「恋」における宇治江と吉岡

ここまでの考察結果から見れば、『世間狙』三之巻三の宇治江と僧との口説の場面における四つの設定は、謡曲『卒塔婆小町』、浄瑠璃作品『都年玉』、『七小町』と関連していないが、『世間狙』三之巻三の石河五郎市は、出生において、演劇作品『釜淵雙級巴』の石川五右衛門と緊密に関連している。

『世間狙』が脱稿された明和元年（一七六四）十一月までに、上方で上演された石川五右衛門を主人公とする演劇作品としては、『釜淵雙級巴』、『石川五右衛門』の他、『傾城吉岡染』（近松門左衛門作）が挙げられる。浄瑠璃作品『傾城吉岡染』<sup>④</sup>では、人の前で、男の子の母親が、三味線に合わせて歌う場面が設定されている。

九重ちかき大黒舞<sup>①</sup>東寺口<sup>②</sup>にぞ着給ふ。

みづなの花を。山ぶきの。露の色かとうかされて。<sup>②</sup>しゆしやかのかはつうたひ出すこゑは女のかさのうち。（中略）紙子の袖のしやみせん<sup>③</sup>のこゑにさそはれ。お乗物の内へ申まする。私は

江戸よし原三うらが内の吉岡と申傾城のなれのはて。（中略）

<sup>④</sup>身をかざるはながれの役せんかたつきてふうぞくを。しやれにまぎらしいしやうを。残らず紙子にして。<sup>⑤</sup>門立道中あげ屋入あまたの大夫天神の。花をかざつた一ざへも紙子でくがいをつとめし故。後にはそれが異名となり紙子吉岡紙子けいせいとためしなき名を立られしも。<sup>⑥</sup>かのおひとりを思ふ故かかざるなじみのしるしに。あの子をもふけしことなれば。（中略）めを煩ひて勤もならず残る三年暇をもらひ。男の行を尋る為おもしろからぬ三味せん引。（中略）<sup>⑦</sup>たゞ一せんのはれみを此子にかけるといひさして。涙の末を三味せんに引まき。らすぞあはれ成<sup>⑧</sup>乗物より御意あればおそほのこし本承り。是々其けんばうと云

人は。もとはどこ衆其子をおほたおやじは。（中略）此せがれがて、親也ひながたつくしをしやうがにつらね。（中略）とてものおじひとかきくとけば母上はそなたよりこなたの心すいりやうあれ。（中略）<sup>⑨</sup>おさきくるとよは、るこゑよし岡もよしさらば。又も御えんの有迄といひ返しくりかへす。（中略）紙子のしはのよるべなきうき身の。すゑこそむざんなれ。

千里も一ツ歩には生まれり。人の善悪一念のきざしによつてこのけのむす。いはほ共成ルさ、れ石の石川五右衛門と云者有。

（浄瑠璃作品『傾城吉岡染』（傍線、番号引用者）

浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の傾城吉岡が憲法の母、腰元という場

面の展開は、次である。

- ① 吉岡は、東寺口にいる。
- ② 吉岡は、三味線に合わせ、歌う。
- ③ 吉岡は、傾城である。
- ④ 吉岡は、落ちぶれる。
- ⑤ 吉岡は、かわった装いをしている。
- ⑥ 吉岡は、香春久太郎（憲法）との恋を懐かしく語る。
- ⑦ 吉岡は、物もらいになる。
- ⑧ 吉岡と憲法の母、腰元との間で、「恋」に関する口説が展開される。

【表3】

	『世間狙』三之卷三 宇治江	謡曲『空塔婆小町』 小野小町	『都年玉』 小野小町	『七小町』 お蘭の方	『傾城吉岡染』 吉岡
①	京の智恩院の古門前にいる。	×	×	×	東寺口にいる。(＊1)
②	舞子である。	×	×	×	傾城である。(＊2)
③	かわった装いをしている。	×	×	×	○
④	三味線に合わせ、歌謡を歌う。	無	無	無	○
⑤	―イ 落ちぶれる。(小野小町のまねをする)	△(＊3)	無	無	△(＊3)
⑤	―口 昔の恋を懐かしく語る。(小野小町のまねをする)	△(＊3)	△(＊3)	△(＊3)	△(＊3)
⑥	物もらいになる。(小野小町のまねをする)	△(＊3)	×	×	△(＊3)
⑦	「恋」に関する口説が展開される。	×	○	○	○
⑧	口説が終わった後で、「窃盗」に関する物語が始まる。	×	△(＊4)	×	○

(＊1) 『世間狙』三之卷三の宇治江は、智恩院の古門前におり、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の傾城吉岡は、東寺口にいる。つまり、両者とも寺の門前にいる。

(＊2) 『世間狙』三之卷三の宇治江と智積院の僧との口説の場面では、舞子宇治江は、「墨に染てもお心に色香があるゆへの米交はりなされますのではないかへ」と捲き立て、さらに「川竹の勤なりやこそあしからめ婢なら何かくるしかるべき」と平然としている。そのため、『世間狙』三之卷三の宇治江の舞子という身分は、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の吉岡の傾城という身分と似通っている。

(＊3) 『世間狙』三之卷三の宇治江が小野小町のまねをするという設定を除けば、主人公が落ちぶれるという点において、宇治江は謡曲『空塔婆小町』の小野小町、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の吉岡と一致するし、昔の恋を懐かしく語るとい設定においても、宇治江は謡曲『空塔婆小町』の小野小町、浄瑠璃作品『都年玉』の小野小町、『七小町』のお蘭の方、『傾城吉岡染』の吉岡と似通う。さらに、物もらいになるという設定において、宇治江が謡曲『空塔婆小町』の小野小町、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の吉岡と符合する。

(＊4) 『世間狙』三之卷三では、宇治江と僧との口説が終わってから、石河五郎市の「窃盗」に関する物語が始まる。『都年玉』三段目では、二人の僧が逃げて行った後、小野小町は隠れていた深草少将呼び出す。口説が終わるとい設定において、両者は似通っている。だが、新しく展開される内容において、両者は異なる。

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

三八

⑨ 吉岡と憲法の母、腰元との口説が終わった後で、石川五右衛門の「窃盗」に関する物語が始まる。

『世間狙』三之卷三の宇治江と僧との口説の場面を、謡曲『卒塔婆小町』、浄瑠璃作品『都年玉』、『七小町』、『傾城吉岡染』と比較した結果を表3にまとめる。

表3のように、『世間狙』三之卷三の宇治江と僧との口説の場面は、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の傾城吉岡が憲法の母、腰元という場面と、最も高い類似性を示している。『世間狙』三之卷三の宇治江の人物造形も、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の吉岡の人物造形と、最も高い関連性を持っている。

#### 四 止まない「窃盗」における

石河五郎市と石川五右衛門

上記の考察では、『世間狙』三之卷三の石河五郎市の「窃盗」に関する四つの設定は、演劇作品『釜淵雙級巴』、『石川五右衛門』における石川五右衛門の「窃盗」行為と対応しない。

『世間狙』が脱稿された明和元年（一七六四）十一月までに、上方で上演された石川五右衛門を主人公とする演劇作品として、『石川五右衛門』、『釜淵雙級巴』の他、『傾城吉岡染』（近松門左衛門作）が挙げられる。

山田和人は、石川五右衛門の「窃盗」行為に関して、

松本治太夫正本が、単に生活苦から盗みを働くようになったという説明叙述で終っているところを、本作では、兵法の師匠憲法に献身的に仕える下人五右衛門が、はからずも、盗みの道に踏み入るかたちが増補し、そこからだいに盗人としての貫禄を身につけていく五右衛門の心理の推移が舞台の滑稽な演技と相俟って表現されている。

（『傾城吉岡染』の方法 —— 松本治太夫正本『石川五右衛門』との比較を中心に——）

（傍線引用者）

と分析した<sup>⑩</sup>。「兵法の師匠憲法に献身的に仕える下人五右衛門が、はからずも、盗みの道に踏み入る」設定から、『世間狙』三之卷三の石河五郎市の人物造形と、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の石川五右衛門との共通点がうかがえる。

浄瑠璃作品『傾城吉岡染』では、石川五右衛門の「窃盗」行為に関する物語は、次のように展開されている。

⑩ おさきく<sup>①</sup>とよば、るこゑよし岡もよしさらば。（中略）人の善悪<sup>②</sup>一念のきざしによつてこけのむす。いはほ共成りさ、れ石川の石川五右衛門と云者有。けんばうに兵法の師弟のけい約しん

せつにて。一言ほうをんの下人と成ともに武州を立のき。かみがたにちつ居してあるひはかたに棒をおき又は日よう小ばたらき。主師たるけんばうにずいじゆんしてぞはごくみける。(中略)<sup>④</sup>五右衛門思はずなんの御用でござるといふ。ム、お国からやとひの人足七藏とはそなたか。やい。イヤ七藏とはそなたのことか。あ、あ、私七藏お国からお供いたしましたと。心ならずもこたゆれば。(中略)ぬすみの口が明てきたと心はいきい〜と。

(浄瑠璃作品『傾城吉岡染』(傍線、番号引用者)

<sup>⑤</sup>あの石川とはかの多どの五右衛門よ。師匠をおもんじ我をはくむ其間。不慮にぬすみをしおほえ今がうだうの大將也。

(浄瑠璃作品『傾城吉岡染』中之卷)(傍線、番号引用者)

<sup>⑥</sup>此大ぜいのけんもん衆に今五右衛門が油せめ。かまいりにあふ(中略)<sup>⑦</sup>去ながら世上の人お用心からぬすみにあふ。ぬす人はにくき人用心せぬはたはけ人。人にちがひはなけれ共皆一心のなす所。五右衛門がじせいの一首のうたをきけやとて。石川やはまのまさこはつくる共世にぬす人の。たねはつきせじ。

(浄瑠璃作品『傾城吉岡染』下之卷)(傍線、番号引用者)

浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の石川五右衛門の「窃盗」行為に関する展開は、次の通りである。

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

① 吉岡と憲法の母、腰元との口説が終わった後で、石川五右衛門の「窃盗」に関する物語が始まる。

② 石川五右衛門は、江戸で兵法を習い、その後、師匠と一緒に上方へ行く。

③ 石川五右衛門は、上方で働き、師匠を養っていた。

④ 石川五右衛門は、人々の不用心に、はからずも窃盗を始める。

⑤ 石川五右衛門は、何度も窃盗をする。

⑥ 石川五右衛門は、捕まり、釜煎りの罰を受ける。

⑦ 石川五右衛門は、罰を受けても、人々の不用心によって、盗賊はまた出てくると予言する。

『世間狙』三之卷三の石河五郎市の「窃盗」行為に関する展開を、演劇作品『釜淵雙級巴』、『石川五右衛門』、『傾城吉岡染』(近松門左衛門作)の石川五右衛門の「窃盗」行為と比較した結果を表4にまとめる。

表4のように、『世間狙』三之卷三の石河五郎市の「窃盗」行為に関する展開は、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の石川五右衛門の「窃盗」場面とほぼ一致している。また、『世間狙』三之卷三の石河五郎市の人物造形も、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の石川五右衛門の人物造形と、高い類似性を示している。

ここまでの考察から、『世間狙』三之卷三の宇治江と僧との口説

【表4】

	『世間狙』三之卷三 石河五郎市	『釜淵雙紋巴』 石川五右衛門	『石川五右衛門』 石川五右衛門	『傾城吉岡染』 石川五右衛門
①	口説が終わった後で、「窃盗」に関する物語が始まる。	×	×	○
②	親方の関係で居場所が変わる。	×	×	師匠の関係で居場所が変わる。(※1)
③	自分が働いて、親方を養っていた。	×	×	自分が働いて、師匠を養っていた。(※1)
④	はからずも窃盗を始める。	×	×	○
⑤	何度も窃盗をする。	○	○	○
⑥	捕まり、罰を受ける。	○	○	○
⑦	罰を受けても、人々の不用心によって、窃盗が止まない。	△(※2)	△(※2)	△(※2)

(※1) 『世間狙』三之卷三の石河五郎市も、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の石川五右衛門も、親方(師匠)の関係で、居場所を変える。そして、二人とも最初

の頃、自分で働いて、親方(師匠)を養っていた。

(※2) 『世間狙』三之卷三では、石河五郎市は、罰を受けても、人々の不用心によって、窃盗が止まない。演劇作品『釜淵雙紋巴』、『傾城吉岡染』では、石川五右衛門が、罰を受けても、盗賊は絶えないと予告する。即ち、主人公が罰を受けても、窃盗は止まないと予告する。それに対し、『石川五右衛門』では、石川五右衛門が、罰を受けても、盗賊は絶えないと予告する。因について、『世間狙』三之卷三は、演劇作品『釜淵雙紋巴』、『傾城吉岡染』と同じ、人々の不用心が挙げられているが、『石川五右衛門』では、何の設定もない。そして、『世間狙』三之卷三では、石河五郎市は生き残るが、演劇作品『釜淵雙紋巴』、『石川五右衛門』、『傾城吉岡染』では、石川五右衛門は、釜煎りの罰を受け、死んでしまう。よって、窃盗を続ける人物において、『世間狙』三之卷三は、演劇作品『釜淵雙紋巴』、『石川五右衛門』、『傾城吉岡染』と異なる。

の場面は、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の傾城吉岡と憲法の母、腰元との口説の場面と、最も高い類似性を示している。また、宇治江の人物造形も、吉岡の人物造形と、最も高い関連性を持っている。

その上、『世間狙』三之卷三の石河五郎市の「窃盗」行為に関する物語の展開は、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の石川五右衛門の「窃盗」場面とほぼ一致している。また、石河五郎市の人物造形も、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の石川五右衛門の人物造形と、高い類似性を示している。

つまり、『世間狙』三之卷三の物語の展開が、舞子宇治江の恋愛譚、石河五郎市の転落譚という二つの部分からなっていることは、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』の傾城吉岡の恋愛譚と石川五右衛門の転落譚から影響を受け、設定されたと考えられる。

さらに、『世間狙』三之卷三の冒頭には、「おそろしき物老の化粧師走の月と。近松門左衛門が筆まめ」という記述がある。ここまでの『世間狙』三之卷三と浄瑠璃作品『傾城吉岡染』（近松門左衛門作）との関連性に関する検討からみれば、『世間狙』三之卷三と浄瑠璃作品『傾城吉岡染』（近松門左衛門作）との関連性を暗示するため、『世間狙』三之卷三の冒頭部分に、意図的に近松門左衛門の創作活動に関する評価が入れられたと考えられる。

前掲の山田和人の論説によると、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』では、

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

『石川五右衛門』にない、東寺口の中で、母、腰元と口説を展開する傾城吉岡、及び師匠に献身的に仕えていたが、はからずも盗みの道に踏み込んでしまう石川五右衛門像が描かれた。『世間狙』三之卷三では、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』におけるこの二つの新しい創意が利用され、僧と口説を展開する舞子宇治江、及び自分が働いて、親方を養っていたが、はからずも盗みの道に足を踏み入れる石河五郎市が作り出された。

#### まとめ

以上、『世間狙』三之卷三の物語の展開が、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』と最も強い関連性を持っているため、『世間狙』三之卷三では、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』から影響を受け、舞子宇治江の恋愛譚、石河五郎市の転落譚という二つの部分が設定されたことを論証してきた。

また、『世間狙』三之卷三では、浄瑠璃作品『傾城吉岡染』において新しく増補された東寺口の中で、母、腰元と口説を展開する傾城吉岡、及び師匠に献身的に仕えていたが、はからずも盗みの道に踏み込んでしまう石川五右衛門の人物像が利用され、僧と口説を展開する舞子宇治江、及び自分が働いて、親方を養っていたが、はからずも盗みの道に足を踏み入れる石河五郎市の人物像が描き出され



たことがわかった。

物語の展開における『世間狙』と演劇作品との関連がさらに存在しているため、上田秋成が、演劇作品の新しく増補された場面を、巧妙に『世間狙』の物語の展開に織り交ぜる意図を究明することを、今後の課題としたい。

## 注

- ① 『諸道聴耳世間狙』（『上田秋成全集』第七卷、平成二年八月二十五日、中央公論社）。
- ② 徳田武「秋成の隠微——『諸道聴耳世間狙』に即して——」（『文学』第五十巻第五号、昭和五十七年五月十日、岩波書店）。
- ③ 日野龍夫「秋成と時代物浄瑠璃」（『文学』第五十巻第十号、昭和五十七年十月十日、岩波書店）。
- ④ 森山重雄「上田秋成初期浮世草子評釈」（昭和五十二年四月三十日、国書刊行会）。
- 日野龍夫「秋成と時代物浄瑠璃」（『文学』第五十巻第十号、昭和五十七年十月十日、岩波書店）。
- 日野龍夫「秋成における歴史と人間」（『宣長・秋成・蕪村』、平成十七年五月、ベリかん社）。
- ⑤ 『上田秋成全集』第七卷（平成二年八月二十五日、中央公論社）の「解題」によれば、明和元年十一月までに『世間狙』が脱稿された。また、高田衛の『上田秋成年譜考説』（昭和三十九年十一月、明善堂書店）によると、上田秋成は享保十九年（一七三四）に大坂で生まれ、明和元年十一月までに一度も江戸に下ったことがなく、主な生活拠点が上方に集中していた。
- ⑥ 『義太夫年表』近世篇第一卷（延宝・天明）（昭和五十四年十一月二十三日、八木書店）。
- ⑦ 『歌舞伎年表』第三卷（昭和三十三年三月三十一日、岩波書店）。
- ⑧ 『日本歌謡集成』巻八近世編（平成元年三月二〇日、東京堂）の「解説」によれば、「寛延四年には『絲の調』が出たが、それが次第に増補せられ、明和安永天明の間に屢次改正せられて、遂に享和板の『新大成絲の調』を見るに至り、（中略）他との権衡を考慮して享和元年板の新大成絲の調を採ることにした。
- ⑨ 森山重雄「上田秋成初期浮世草子評釈」（昭和五十二年四月三十日、国書刊行会）。
- 森山重雄「上田秋成初期浮世草子評釈」補遺」（『人文学報』第一三三号、昭和五十四年三月、国書刊行会）。
- 日野龍夫「秋成と時代物浄瑠璃」（『文学』第五十巻第十号、昭和五十七年十月十日、岩波書店）。
- 神楽岡幼子「世間狙」の挿絵」（『国文学』第七十号、平成五年十二月、関西大学国文学会）。
- ⑩ 謡曲「卒塔婆小町」（新日本古典文学大系57『謡曲百番』、平成十年三月、岩波書店）。
- ⑪ 『小野小町都年玉』（『紀海音全集』第二卷、昭和五十二年十一月二十五日、清文堂。底本（正徳三、四年頃の正月か、版元正木屋西沢九左衛門版、大阪府立中之島図書館蔵）。
- ⑫ 『大和歌五穀色紙』（『古浄瑠璃正本集加賀掾編』第五、平成五年二月二十八日、大学堂書店。底本（板元山本九兵衛（推定）、東京大学教養学部国文学研究室蔵）。
- ⑬ 『七小町』（『竹本座浄瑠璃集』（一）、昭和六十三年六月二十五日、国



書刊行会)。底本（早稲田大学演劇博物館蔵）。

⑫ 『七條釜淵雙級巴』（續帝國文庫19『校訂並木宗輔浄瑠璃集』、明治三十三年二月二十八日、博文館）

⑬ 『石川五右衛門』（徳川文藝類聚 第八 浄瑠璃）、昭和四十五年九月一日、國書刊行会）。

⑭ 『傾城吉岡染』（近松全集）第五卷、昭和六十一年七月十八日、岩波書店。底本（版元大坂山本九兵衛・九右衛門、松竹大谷図書館蔵）。

⑮ 山田和人「『傾城吉岡染』の方法——松本治太夫正本『石川五右衛門』との比較を中心に——」（『同志社国文学』第十九号、昭和五十六年十月、同志社大学国文学会）。